

成人看護学における簡易血糖測定演習の経験から得た看護学生の気づき —患者役の経験をととして—

岩瀬 和恵¹⁾ 平井 孝次郎¹⁾ 牛尾 陽子¹⁾ 武内 和子¹⁾

要 旨

目的：本研究は、看護学生が簡易血糖測定演習で演習時の役割である患者役をととして得た気づきを明らかにすることを目的とした。

方法：A看護短期大学2年生を対象とし、演習時の役割（自己測定、看護師役、患者役）のなかの患者役について自由記述された80名の演習記録を質的帰納的に分析した。

結果：簡易血糖測定演習の患者役をととして得た気づきには、【他者から針を刺される恐怖】、【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】、【患者から看護師へ注がれる視線】、【患者に行う的確な説明の大切さ】、【患者と看護師の信頼関係の重要性】の5カテゴリーが抽出された。

考察：看護学生が簡易血糖測定演習で患者役を実施することで、他者から針を刺されるという恐怖はあるが、患者の視線で看護師を捉え、患者に行う的確な説明の大切さ、患者と看護師の信頼関係の重要性といった看護師に必要なスキルに気づき、この気づきを今後に生かそうと考えていることが示唆された。

キーワード：簡易血糖測定、看護学生、患者役、気づき、成人看護学

I. 緒言

平成29年「国民健康・栄養調査」の結果¹⁾によると、我が国では「糖尿病が強く疑われる者」の割合は、男性18.1%、女性10.5%である。「糖尿病が強く疑われる者」は約1000万人以上と推計される。病院において、血糖値検査は一般的に行われており、測定する方法として、静脈血採血と簡易血糖測定器を用いた方法がある。その中でも簡易血糖測定は病院や自宅において日常的に行われている。簡易血糖測定とは、簡易型の穿刺器具を用いて指先に穿刺を行い、得られた血液の血糖値を、血糖測定器を用いて簡易的に測定する方法であり、主に糖尿病の治療や管理を目的として行われている。簡易血糖測定には、看護師が患者へ行う方法と、患者が自分自身で行う方法（血糖自己測定：Self-Monitoring of Blood Glucose、以下SMBG）の2通りが一般的である。簡易血糖測定は、厚生労働省が提唱する看護師等養成

所の運営に関する指導ガイドライン、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度²⁾の中で「簡易血糖測定ができる」という項目があり、卒業時の到達度はⅡの「指導の下で実施できる」と明記されている。このような背景から、看護学生が糖尿病患者を理解し、簡易血糖測定技術を習得する一環として、A看護短期大学成人看護方法Ⅳの授業では、簡易血糖測定の技術演習を取り入れている。

簡易血糖測定の技術演習に関する先行研究では、看護学生が他者へ穿刺行為を行うことでの精神・身体的負担の大きいこと³⁾や、恐怖や不安、緊張といった感情を持つことが報告されている^{4) 5)}。一方で、基礎看護教育において安全面から侵襲的技術の学習が制限される中、SMBG演習における学びは大きく^{6) 7)}、SMBGを患者に指導する看護師役、実施する患者役をととして患者の自己管理につながる学びや学習効果^{8) 9)}が報告されている。しかし、病院では看護師が患者に簡易血糖測定を実施することも少なくない。それゆえに、成人看護方法Ⅳの授業で

1) 川崎市立看護短期大学

は、SMBG演習の他に看護師役から簡易血糖測定をされる患者役を設け、技術演習をしている。その中で、看護学生が、他者から穿刺される患者役を経験し、どのような気づきを得ているのかは不明である。SMBGに関する研究は散見されているが、他者から簡易血糖測定を実施される患者役の気づきに関する研究はほとんどない。したがって、看護学生が簡易血糖測定演習で演習時の役割である患者役をとおして得た気づきを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は看護学生が簡易血糖測定演習で演習時の役割である患者役をとおして得た気づきを明らかにすることである。

Ⅲ．用語の定義

気づき：気が付くこと¹⁰⁾。本研究における気づきは、看護学生が簡易血糖測定演習をとおして気が付いた事柄と定義する。

Ⅳ．研究方法

本研究は、演習記録内容から得られたデータを帰納のプロセスで分析した質的記述的研究である。

1. 研究対象者

A看護短期大学3年課程2年次の平成25年度成人看護方法Ⅳの履修者85名のうち、研究参加への同意が得られた80名である。

2. 簡易血糖測定演習方法

簡易血糖測定演習は成人看護方法Ⅳの科目の一部である。成人看護方法ⅣはA看護短期大学において2年次前期に開講されており、慢性期にある人を対象とした看護を学ぶ1単位15コマの必修科目である。本科目では、成人看護学概論での学習を基盤にしながら必要な看護を判断し、生涯にわたり疾病コントロールを必要とする人への看護を実践できる能力を身につけることを目標としている。また、慢性期にある人の特徴および看護の概要を理解し看護過程展開の方法を学ぶことに加え、患者教育および看護技術を体験する演習を多く取り入れている。簡易血糖測定演習はその一環であると同時に侵襲を伴う行為であることから、看護師として望まれる言動や態度の習得および患者の理解や関係性を考える機会

になることを期待して実施されている。

成人看護方法Ⅳにおける簡易血糖測定演習は、以下のように展開した。

- 1) 血糖測定の授業は2コマ続きに設定し、血糖測定演習前に糖尿病薬物療法と血糖測定の意義と方法が理解できる1時間の講義を実施した。
- 2) 講義後、学生は1グループ4～5名、8グループに分かれて演習を実施した。安全確保のため教員は4名とした。
- 3) 教員によるデモンストレーション後、各々がSMBGを実施した。
- 4) 教員によるデモンストレーション後、グループ内で看護師役、患者役の役割に分かれ相互に血糖測定を実施した。
- 5) 血糖測定を実施した学生は、SMBG、看護師役・患者役での血糖測定において考えたこと、感じたことを演習記録として自由に記載した。
- 6) 教員は全体のタイムスケジュールを管理するとともに各教員2グループを担当した。学生の安全性を図りつつ、学生の疑問に素早く応じ助言した。
- 7) 演習記録は演習終了後にレポート箱へ提出とした。

3. データ収集方法

成人看護方法Ⅳで行った簡易血糖測定演習後に提出した演習記録からデータ収集を行った。データ収集日は平成25年6月であった。演習記録は、A4用紙1枚の自由記述であり、簡易血糖測定演習の「SMBG」、「看護師役」、「患者役」の3項目において、考えたこと・感じたことを記述してもらった。なお、本研究は「患者役」に焦点を当てているため、演習記録の「患者役」の部分をデータ収集した。

4. 分析方法

演習記録から、看護学生が簡易血糖測定演習で患者役となって考えたこと・感じたことの自由記述すべてのデータを分析対象とし、質的帰納的に分析した。まず、すべてのデータを反復して熟読し、データから文脈の意味を損なわないように注意しながらコードを作成した。次に、コードから類似性と相違を比較検討し、サブカテゴリーを抽出した。サブカテゴリーからさらに抽象度を上げ、カテゴリーとし

た。その際、抽象度を上げすぎず、具体的な記述となるように努めた。そして「看護学生の気づき」に着目し、カテゴリーを抽出した。分析過程において、カテゴリー名が適切であるかを随時自由記述内容に戻り、再検討し、適宜修正を行った。また、分析の全過程において、著者間および質的研究に携わる研究者と議論し、分析方法と内容の妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

本研究は、川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：R25-1）。研究対象の学生には、成人看護方法Ⅳの講義開始前に研究の目的、方法、内容、結果の公表について文書と口頭で説明した。科目の評価は定期試験結果および出欠状況、演習参加状況、課題レポートの結果を総合的に判断し評価するものであり、本研究で用いた演習記録は課題レポートの位置づけではなく評価対象ではないこと、研究への参加は自由意思であり、中止・中断した場合も一切不利益を被らないこと、参加の有無は成績に一切影響しないこと、匿名性を保持すること、データは成績が出た後に使用することおよび研究目的以外で使用しないことを説明し、同意書を配布した。同意書は、演習室とは別の場所に設置した回収箱へ講義終了後に提出してもらった。

V. 結果

本研究の同意が得られた看護学生80名の演習記録から、患者役をとおして得た気づきを質的に分析した結果、【他者から針を刺される恐怖】、【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】、【患者から看護師へ注がれる視線】、【患者に行う的確な説明の大切さ】、【患者と看護師の信頼関係の重要性】の5つのカテゴリーが抽出された。カテゴリー、サブカテゴリーを表1に示す。分析結果の記述は、以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、自由記述の原文を「 」で示す。

1. 【他者から針を刺される恐怖】

【他者から針を刺される恐怖】は、<誰かに針を刺されるという怖さ>、<刺されるタイミングがわからない怖さ>の2つのサブカテゴリーから構成された。

<誰かに針を刺されるという怖さ>では、「人に

針を刺されるのが怖いと思いました」や「自分で針を刺すのも怖いけど、他者から穿刺されることも十分怖いと感じた」という自由記述が含まれた。

<刺されるタイミングがわからない怖さ>には、「行きますよなどの声かけをされてから針が刺さるまで少し時間がかかるため、いつ刺されるか分からず怖かった」や「穿刺することを伝えられてから実際に刺すまでやっぱり少し時間がかかっていつチクッとするのか分からず怖かったです」という自由記述があった。

2. 【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】

【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】は、<針を刺す側から伝わる緊張感>、<看護師の態度で抱く恐怖心>、<看護師の落ち着いた様子で抱く安心感>の3つのサブカテゴリーから構成された。

<針を刺す側から伝わる緊張感>では、「看護師役の緊張がこちら側にも伝わり、緊張してしまった」や「看護師さんの緊張は患者さんにも伝わってくるものだと感じました」の記述があった。

<看護師の態度で抱く恐怖心>には、「看護師さんも怖い怖いとためらっていてドキドキして自分で行うより恐怖心が大きかったです」や「少しでも看護師役がおどおどしていると怖いと思う」という記述が含まれた。

<看護師の落ち着いた様子で抱く安心感>では、「相手が堂々としていたので、その姿を見たら安心できたので、実際の時も看護師の態度は大切だと改めて感じました」や「落ち着いた様子で処置してもらえると、安心するし、声かけ一つで恐怖はかなり薄れると思った」という記述があった。

3. 【患者から看護師へ注がれる視線】

【患者から看護師へ注がれる視線】は、<看護師の行動をよく見ている患者>、<看護師を見る患者の目線>の2つのサブカテゴリーから構成された。

<看護師の行動をよく見ている患者>には、「患者役をやってみて、患者さんは思ったより看護師の行為を見ていると感じます。自分が患者役を行う時、いつも看護師をじっと見てしまうし、そのやり方怖いとか感じる時もあるので、自分が看護師のときは気をつけようという気持ちになります」や「看護師にとっては日常茶飯事の処置かもしれないが患者はその1つ1つを良く見ている」の記述が

表1 看護学生が簡易血糖測定演習で演習時の役割である患者役をとおして得た気づき

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
他者から針を刺される恐怖	誰かに針を刺されるという怖さ	<p>人に針を刺されるのが怖いと思った</p> <p>他者から穿刺されることも十分怖いと感じた</p> <p>他人に実施されるのは自分で測定するよりも恐怖感がある</p> <p>他者から血糖測定を行われることに恐怖感を感じた</p>
	刺されるタイミングがわからない怖さ	<p>穿刺することを伝えられてから実際に刺すまで時間がかかり怖かった</p> <p>針を刺すタイミングが分からず怖かった</p> <p>行きますよとの声かけから針が刺さるまで時間がかかり、いつ刺されるか分からず怖かった</p>
看護師の態度が患者へ及ぼす影響	針を刺す側から伝わる緊張感	<p>看護師役の緊張がこちら側にも伝わり、緊張した</p> <p>緊張は患者さんにも伝わってくるもの</p> <p>相手がためらっていたり、怖がっているのは自分にも十分に伝わってくる</p> <p>指先が震えていたので、相手も緊張していたのだと思う</p> <p>看護師の不安は患者さんに影響してしまうと思う</p>
	看護師の態度で抱く恐怖心	<p>看護師さんも怖い怖いとためらっていてドキドキして自分で行うより恐怖心が大きい</p> <p>少しでも看護師役がおどおどしていると怖いと思ってしまう</p> <p>看護師がおどおどしているとやってもらいたくなくなるので看護師の態度も大切だ</p>
	看護師の落ち着いた様子で抱く安心感	<p>相手が堂々としていたので、その姿を見たら安心できた</p> <p>落ち着いた様子で処置してもらえると、安心するし、声かけ一つで恐怖はかなり薄れる</p> <p>看護師は自信を持って行うほうがこちらでも安心して受けられる</p> <p>安心して任せられる看護師だと患者の恐怖心がなくなる</p> <p>看護師の落ち着いた様子で安心する</p>
	患者から看護師へ注がれる視線	<p>患者役をやってみて、患者は思ったより看護師の行為を見ている</p> <p>看護師にとっては日常茶飯事の処置かもしれないが患者はその1つ1つを良く見ている</p> <p>最初から最後まで手順を目の前で見ている</p>
患者に行う的確な説明の大切さ	看護師の行動をよく見ている患者	自分が看護師になったら患者は常に看護師の行動をみているということを実感
	事前に行う説明の大切さ	<p>簡単な処置でも十分な説明をすることが大事</p> <p>ちゃんと声かけしたり、事前に説明してもらえると安心した</p> <p>きちんとした説明を受け、納得することも必要である</p> <p>簡単な処置でも十分な説明をすることが大事</p>
	患者にける一語一句の大切さ	<p>なぜ針を刺して血液を採るのかきちんと説明をできるようにすることも大切</p> <p>患者役を体験することにより、看護師の一語一句がとても気になった</p> <p>話し方、言い方にも十分注意する必要がある</p> <p>看護師役の細かい声かけの大切さ</p> <p>1つ1つの行動に言葉かけしたほうがいいと思った</p>
	看護師への信頼により出せる指	<p>傷つけられることを承知の上で他者に手を差し出すのは信頼していないと難しい</p> <p>手を一度包んでゆつくりと説明してくれたので、この人は丁寧に扱ってくれるだろうと感じ、力を抜くことができた</p> <p>学生同士なので、看護師にゆだねることができる心境にまでは至らず少し緊張した</p> <p>安心できる事前説明、声かけ、丁寧かつ迅速な手技が信頼感につながる</p> <p>相手を信頼していれば安心できる</p>
患者と看護師の信頼関係の重要性		<p>自分は失敗されなかったけど、失敗なんかされたら本当に信頼関係が崩れる</p> <p>何度もやり直されたりした場合、看護師に不信感を抱く原因になってしまう</p> <p>看護師さんがおろおろしているものすごく心配になって、やってもらいたくなくなる</p> <p>知っている相手でも、穿刺が失敗したら嫌だと思った</p> <p>相手に針を刺してもらうのはいくら相手のことを信頼していても少し緊張した</p> <p>血が出なければ看護師に一声言いたくなるだろう</p>

あった。

＜看護師を見る患者の目線＞では、「最初から最後まで手順を目の前で見ているので、自分が看護師になったら患者様は常に看護師の行動をみているということを実感しました」という記述が含まれた。

4. 【患者に行う的確な説明の大切さ】

【患者に行う的確な説明の大切さ】は、＜事前に行う説明の大切さ＞、＜患者にかける一語一句の大切さ＞の2つのサブカテゴリーから構成された。

＜事前に行う説明の大切さ＞では、「ちゃんと声かけしたり、事前に説明してもらえると安心した」や、「看護師さんに説明してもらいながらやってももらいました。説明の言葉が少し不足していて最初あまり伝わってこなく不安でした。簡単な処置でも十分な説明をすることが大事だと思いました」という記述があった。

＜患者にかける一語一句の大切さ＞には、「患者役を体験することにより、看護師の一語一句がとても気になった。時々様子を見ながら声かけをすることは、とても大切なことだと改めて思いました」や、「コミュニケーションの時間はわずかではあるが、話し方、言い方にも十分注意する必要があると思いました」という記述が含まれた。

5. 【患者と看護師の信頼関係の重要性】

【患者と看護師の信頼関係の重要性】は、＜看護師への信頼により出せる指＞、＜不適切な手技で崩れる信頼関係＞の2つのサブカテゴリーから構成された。

＜看護師への信頼により出せる指＞では、「傷つけられることを承知の上で他者に手を差し出すのは信頼していないと難しいことだと感じました」や「手を一度包んでくれてゆっくりと説明してくれたので、この人は丁寧に扱ってくれるだろうと感じ、力を抜くことができました」という記述があった。

＜不適切な手技で崩れる信頼関係＞には、「自分は失敗されなかったけど、失敗なんかされたら本当に信頼関係が崩れるなと思いました」や「何度もやり直されたりした場合、看護師に不信感を抱く原因になってしまうこともありそうだと感じました」という記述が含まれた。

Ⅵ. 考察

看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の中の「簡易血糖測定ができる」はⅡの「指導の下で実施できる」が到達目標である。令和元年10月15日に、現在改正案が発表されているが、本項目は現状のⅡのままである¹¹⁾。本研究は平成25年のデータであるが、看護師教育の授業項目と卒業時達成度には変更がないことおよび他者から穿刺される看護学生の気づきについて、先行研究には見当たらなかったため、教育方法の基礎的資料となり得ると考え、公表に至った。以下に考察を述べる。

【他者から針を刺される恐怖】のカテゴリーでは、演習で実際に他者から針を刺される経験からゆえに得られる気づきであると考ええる。静脈血採血の先行研究では、シミュレーターを用いた演習や仮想採血として実際には穿刺しないが学生間で採血を行う予定の血管の上で模倣練習することで、患者役の心理がより理解できるように工夫されている^{12) 13)}。しかし、学生間で実際には穿刺していない演習であり、看護学生が穿刺されるという覚悟を持って臨む演習とは気づきが異なっていると考えられる。例えば、檀原¹³⁾の研究では、『針が刺さるのではないかと怖かった』とのコードがあるが、本研究では【他者から針を刺される恐怖】のサブカテゴリーである＜刺されるタイミングがわからない怖さ＞のコードとして『針を刺すタイミングが分からず怖かった』とある。これは実際に穿刺されるという覚悟の上で刺されるタイミングを怖がっている。このように本研究には実際に穿刺される状況下でしか得られない気づきがあり、学生間で実際に穿刺する演習の有用性を示すことができたと考ええる。今後も学生間で実際に穿刺する演習を取り入れ、看護学生の学びにつなげていく。

【患者から看護師へ注がれる視線】のカテゴリーでは、患者役という他者から穿刺される立場を経験し、自分自身を客観的に見つめることで気づくことができる事象である。看護学生は患者役を実施しながら、自分自身の患者役としての行動に気づき、患者を想定して考えていることがうかがえた。これはメタ認知であると言える。メタ認知とは、一般に認知の認知である¹⁴⁾。看護学生は患者役となり、他者に穿刺されることで自分の思考に気づき、そして行動も認知している。例えば、＜看護師の行動をよ

く見ている患者>では、患者役をしている自分自身が看護師役である学生の行動をよく見ていることを客観的に捉えている。そしてこの気づきは自分が看護師役になった時、どのように振舞うことが患者を安心させ、確実に技術を実施できるかを思考している。患者によっては看護師の手技を全く見ない患者もいるが、大抵は自分が何をされるか興味または不安から、看護師の手技に注目していることが推察される。看護学生は、患者役を実施することで、患者の目線をメタ認知でき、患者の理解につなげることができたと考える。

【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】の 카테고리では、看護学生が患者役をとおして看護師役の学生の気持ちを察している様子がうかがえた。加えて看護師役の学生の緊張や落ち着き具合で自分自身の気持ちも左右されることを感じ取っていた。これは、他者に穿刺される側の立場に立たないと感じ取れない事象であり、患者役を実施する有用性を示唆している。静脈血採血演習ではあるが、小田川¹⁵⁾の研究でも、実際に穿刺される患者役となった学生の感じたこととして、同様の結果が得られている。看護学生は患者役の経験をとおして、看護師側の気持ちが患者に伝わり、その影響により患者の心が揺れ動くことに気づいたと考えられる。またそれは、看護師の態度だけではなく、説明の声かけ、そして言葉遣いにも言えることであり、【患者に行う的確な説明の大切さ】の 카테고리にあるように、看護学生が患者役をすることで、看護師の説明の仕方、看護師の一語一句を患者は余すことなく聞き入っており、事前説明や言葉遣いの大切さに気づいていた。そして『話し方、言い方にも十分注意する必要がある』と看護師に必要な姿勢に気づき、今後にかそうとしていた。

【患者と看護師の信頼関係の重要性】の 카테고리では、看護学生は看護師役に穿刺される以前に、患者と看護師の信頼関係の重要性にも気づいている。例えば、サブカテゴリである<看護師への信頼により出せる指>には侵襲を伴う処置であることを承知の上で、この看護師にだったら穿刺されてもいいという患者の気持ちを感じ、信頼関係の重要性を導き出していると考えられる。また、初めて患者へ穿刺した看護学生の体験の研究¹⁵⁾では、『未熟な自分が穿刺することへの葛藤』というカテゴリが抽出されており、本研究で患者役をとおして

気づいた看護師の態度は例え未熟で緊張が伝わっていたとしても、信頼関係があることで、患者は簡易血糖測定のために指を差し出してくれるであろう。反対に、不適切な手技である場合は、信頼関係が崩れてしまうことに看護学生は気づいており、信頼関係の重要性を捉えていた。

平岡⁶⁾は、SMBG技術演習の実施により、患者の立場から考えることができると報告している。これは、侵襲を伴う演習により痛みや手技の複雑さを経験することで患者を想定して患者理解を深めようとしている。本研究では【他者から針を刺される恐怖】、【患者から看護師へ注がれる視線】の カテゴリが示すように、実際に他者から簡易血糖測定を実施されることで、SMBGの実施だけでは得ることができなかった患者側からの気づきを深めていることがうかがえた。また、静脈血採血演習で実際に学生間で採血演習をした研究¹⁶⁾ ¹⁷⁾や仮想採血演習¹³⁾では、看護師役の行動が患者の心理に影響することや、患者に説明する大切さが報告されており、本研究は簡易血糖測定技術演習であるが、【看護師の態度が患者へ及ぼす影響】、【患者に行う的確な説明の大切さ】の カテゴリが示すように本研究でも同様の結果が得られた。このことから、実際に穿刺を実施するかしないかに関わらず、看護学生は看護師の態度が患者に影響し、患者に行う説明の重要性を演習から学んでいることが考えられる。

患者役を実施することで、【他者から針を刺される恐怖】はあるが、患者の目線で看護師を捉え、【患者に行う的確な説明の大切さ】や【患者と看護師の信頼関係の重要性】といった看護師に必要なスキルに気づき、この気づきを今後にかそうと前向きに考えていることが示唆された。平井¹⁸⁾は、看護学生が患者役を経験することで患者理解を深め、看護師の役割の重要性に気づいたと述べている。本研究では、患者理解や看護師役割の重要性をより具体性のある記述とすることができた。

以上のことから、看護学生が簡易血糖測定演習で患者役となり、看護師役の学生に穿刺されるという経験は、患者の思いをより深く実感でき、看護師としてどのように実施するかを考える場となっており、患者役を実施することの有用性があったと考えられる。

Ⅶ. 研究の限界および今後の課題

本研究の結果は、A看護短期大学2年次の看護学生のための患者役をとおして得た気づきであるため、実際の患者ではなく、患者役を実施した看護学生の記述であり、実際の患者がどう感じているかは不明である。しかし、患者の立場となつて考えることができる演習であり、有用性があつたと考える。また、本研究は看護学生の演習記録の自由記述内容の分析であり、看護学生の気づきすべてを網羅しているとは言い難い。今後は、経年的にデータを収集し、分析していく必要がある。

謝辞：本研究にご協力頂いたA看護短期大学2年生の皆様へ感謝申し上げます。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

著者資格：K.Iは、研究の着想・デザイン・分析・解釈をし、原稿を作成した。K.Hは、研究の着想・データ収集・分析・解釈をし、最終原稿について確認した。Y.U、K.Tは分析・解釈に貢献し、最終原稿について確認した。

付記：本研究の一部は22rd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) conferenceにて発表した。

Ⅷ. 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 平成29年「国民健康・栄養調査」の結果.
〈https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177189_00001.html〉, (参照2019-10-14)
- 2) 厚生労働省. “「助産師・看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」について”.
〈http://www.hospital.or.jp/pdf/15_20080208_01.pdf〉, (参照2019-10-24)
- 3) 杉山敏子, 渡邊生恵, 柏倉栄子, 菊地史子. 看護学生が初めて注射針を刺入する際の生理心理指標の変化. 東北医短部紀要. Vol. 11, no. 2, 2002, p. 221-228.
- 4) 河井伸子, 川端京子. インスリン自己注射と自己血糖測定の実習を振り返ってー役割演技シミュレーションを取り入れた実習の試みー. 大阪市立大学看護短期大学部紀要. Vol. 5, 2003, p. 11-17.
- 5) 山崎智代, 平田礼子, 細矢智子, 小山英子. 学生間での採血技術実習における看護師役割体験の学習内容ー学内実習後の質問紙調査の内容分析からー. つくば国際大学医療保健学研究. Vol. 1, 2010, p183-191.
- 6) 平岡知美, 福田和明, 生島祥江. 自己血糖測定技術実習における学生の学びの分析. 神戸常盤短期大学紀要. Vol. 29, 2008, p. 67-74.
- 7) 森京子, 古川智恵. 臨地実習未経験の看護大学生の血糖自己測定実習における学び. 四日市看護医療大学紀要. Vol. 10, no. 1, 2017, p. 11-18.
- 8) 三上ふみ子, 新田純子. 看護学生の自己血糖測定技術実習からの学びの分析ー患者役の経験から具体的な患者指導を導き出すプロセスー. 青森中央学院大学研究紀要. Vol. 26, 2016, p. 29-37.
- 9) 三上ふみ子, 新田純子. 看護学生の自己血糖測定技術実習の学びの分析ー看護師役の経験的学習に焦点をあててー. 弘前学院大学看護紀要. Vol. 10, 2015, p. 27-33.
- 10) 新村出. 広辞苑. 第六版, 岩波書店, 東京.
- 11) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会 報告書. 〈https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html〉, (参照2019-11-14)
- 12) 畑瀬智恵美, 澁谷香代. 学生同士による採血の体験学習からの学びー患者役と看護師役を通して. 日本看護学会論文集: 看護教育. Vol. 39, 2009, p. 436-438.
- 13) 檀原いづみ, 三木隆子, 新居アユ子, 杉野美礼. 真空採血技術実習の学生の学びー患者役、看護師役を体験して. 四国大学紀要. Vol. 39, 2014, p. 21-30.
- 14) 諏訪正樹. メタ認知的言語化による身体技の開拓. 情報処理学会シンポジウム論文集. Vol. 12, 2007, p. 107-111.
- 15) 小田川良子, 高下智香子, 北川奈美, 竹本綾美, 飛田沙知, 細谷ゆかり. 静脈血採血時の患者への配慮情意領域に着目した技術実習の効果. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要. Vol. 14, 2019, p. 32-43.

- 16) 平田礼子, 山崎智代, 細矢智子, 小山英子. 採血演習における患者役割体験についての学生の認識 採血終了後の調査から. 医療保健学研究. Vol. 1, 2010, p. 171-182.
- 17) 松本珠美, 伊藤ちぢ代. 看護学生の静脈血採血演習授業における安全に関する学びの研究. 藍野学院紀要. Vol. 26, 2014, p. 87-97.
- 18) 平井孝次郎, 小濱優子, 岩瀬和恵, 牛尾陽子, 武内和子. 成人看護学における簡易血糖測定演習を実施した看護学生の感性の定量的特徴—テキストマイニング・感性分析を用いて—. 川崎市立看護短期大学紀要. Vol. 24, 2019, p. 55-62.